

## 第1章 アルメニア民族政党間関係とソヴィエト・アルメニア（1920-23年）

吉村貴之

### はじめに

ロシア帝国とオスマン帝国に分かれて居住していたアルメニア人社会は第一次大戦によって解体した。オスマン帝国側ではアルメニア人が虐殺・追放され、ロシア帝国側では革命後の混乱の中で成立したアルメニア「第一共和国<sup>1</sup>」（1918-20）は短命に終わったために、無秩序な状態にあった。

ところで、その直後に成立したソヴィエト・アルメニア初期におけるソヴィエト政権と在外民族主義政党との関係については、アルメニア人の研究者の間では極めて「政治的な」テーマであった。概してソヴィエト・アルメニアでは「本国」と在外アルメニア人社会との関係については「ソヴィエト社会建設の妨害者」民族政党（つまりダシュナク党）批判の文脈でのみ語られた（Arzumanyan 1973; Meliqset'yan 1985 など）。一方、国外のアルメニア人研究者にはダシュナク党こそがアルメニアを代表する政党との先入観があるために、そもそもダシュナク党とラムカヴァール・アザタカン党との対立（後述）についてはソヴィエト側のプロパガンダとして忌避する傾向にあった。さらに、アルメニアの独立後の「第一共和国」再評価のあおりで、アルメニア人研究者全体の関心が「第一共和国」期に集中しているのが現状である。

しかしながら、第一次大戦によって一旦は解体したアルメニア人社会がソヴィエト・アルメニアとして復興し、しかもそれがアルメニア人社会の中心であると広く認知されていく過程を探る上では、「本国」と在外アルメニア人社会との関係は単なる「政治的」問題ではなく、現代アルメニア人のナショナル・アイデンティティ論として重要であろう。

### 1. 本稿のアクターと背景

#### (1) 政党

まずダシュナク党（正式名称はアルメニア革命連盟）であるが、1890年末にチフリス（現トビリシ）でアルメニア最初の社会主義政党フンチャク党の左派およびいくつかの民族主義勢力が結集して成立した。1907年にロシアのナロードニキ政党エスエル（社会革命党）と活動提携を結び、民族主義的社会主義を模索した。

---

<sup>1</sup> この名称の由来については、吉村(2002)を参照のこと。

次にラムカヴァル・アザタカン(民主自由)党であるが、1908年にイスタンブルで結成された。支持者には富裕な商人や銀行家が多く、オスマン帝国内で活動していた社会団体「アルメニア慈善協会」と密接な関係を持ち、慈善協会名誉理事 V.マレズィアンはラムカヴァル党員であった。この点では零細商工業者や下級聖職者出身者が多いダシュナク党とは対照的で、むしろブルジョワ政党と呼べるものである。

最後に共産党についてであるが、主要メンバーにはロシア内地出身あるいはその地に長く在住したアルメニア人が多く、例えば人民委員会議長 A.ミアスニキアン、人民経済会議議長 S.ルカシンなどはドン川流域のロストフの生まれである。もっとも、ダシュナク党員と共産党員の間には共通点もある。両者とも高等教育はモスクワやペテルブルクまたはチフリスで受け、ロシア人の革命運動の影響を受けている<sup>2</sup>。この点では、両者はオスマン帝国のエリートを中心とする民主自由党と大きく異なっている<sup>3</sup>。

以上、三者三様、出身地域や階層に偏差があることがネップ期のソヴィエト・アルメニアの政治状況を考察する上で重要な要素となっている。

## (2) エレヴァンを含むアララト地方の特異性

現在においてこそエレヴァン<sup>4</sup>はアルメニアの政治・文化の中心地としてアルメニア人の間では認知されているが、20世紀初頭においてはアルメニア人社会の中心ではなかった。

例えば、1900～1914年におけるアルメニア語の定期刊行物の出版点数をロシア、オスマン領内の都市ごとにみると、この15年間でもっとも定期刊行物の出版点数が多いのがイスタンブル(144点)、ついでチフリス(93点)で、エレヴァンはその近郊のエチミアジン<sup>5</sup>をあわせても11点であり、バクー(36点)やヴァン<sup>6</sup>(25点)にも及ばない<sup>7</sup>。

では、なぜエレヴァンがアルメニアの中心となったのであろうか。十月革命後にロシア軍が南カフカース(コーカサス)から撤退した隙を突いて、1918年3月オスマン軍が侵攻してきたため、旧ロシア領地域はザカフカース連邦を結成して防戦するが敗北を喫した。その和平交渉時に、グルジアはドイツの庇護下で、アゼルバイジャンはオスマン軍の保護を受けてそれぞれ独立したため、ダシュナク党も同年5月28日独立に追い込まれることとなった。そして、当時のアルメニア人勢力の支配地域がアララト地方だったためにダシュナク党政府はトビリシからエレヴァンに

---

<sup>2</sup> 第一共和国最期の首相ヴラツィアンの回想によれば、ミアスニキアンとは同じノル・ナヒチェヴァンの司教学校で学び、ダシュナク党のサークルに出入りしていたという (Vraccyan 1955-1967: A, 59-60)。

<sup>3</sup> ロシア、オスマン両帝国間でのアルメニア人知識人の教育さらには世界観の違いについては、吉村(2000)を参照のこと。

<sup>4</sup> 1828年から1936年までロシア語では Erivan' と呼ばれていた。

<sup>5</sup> カトリコス(教長)と呼ばれるアルメニア教会の首長の座があり、19世紀にロシア領となつてからは帝国領内のアルメニア教会を監督下に置き、教会の総本山の役割を果たすようになる。

<sup>6</sup> 現在はトルコ東部の都市。

<sup>7</sup> Babloyan, Hay parberakan Mamule を基に算出。なお、発行部数や期間はとりあえず無視して1紙(誌)1点として勘定した。

「遷都」したが、その首都としての基盤は不安定であった(詳細は、高橋 1974 を参照のこと)。「第一共和国」は現在のアルメニア共和国の領土の原型となる地域は確保したものの、国家機関を整備し産業を育成するには 2 年半という時間は短すぎたのである。

## 2. 共産党とダシュナク党との関係

1920 年 11 月 29 日に赤軍がアルメニアに侵入したために、ダシュナク党政権は崩壊し、12 月 2 日にはソヴィエト政権の樹立が宣言された。新たに成立したソヴィエト政権は、形式上はダシュナク党左派との連立政権であるとはいえ、12 月 6 日にはチェ・カ(反革命怠業取締非常委員会、後の KGB)によってダシュナク党幹部が逮捕され、翌 21 年の 1 月には第一共和国期の高名な将軍達がロシア内地に追放された(Hovannisian 1996: 403-406)。また、農村においてはボリシェヴィキによる食料徴発が始まっていたため、農民の不満が高まっていた(Simonyan, H. 2000: 397-403)。

そして、2 月に叛乱が起こり、18 日に赤軍はエレヴァンから撤退したが、グルジアにソヴィエト政権が成立してからは勢いを取り戻し、4 月 2 日赤軍が首都を奪還した。S. ヴラツィアン元首相は列強やトルコ大国民議会に援助を求めたが、何の反応もなく、ダシュナク党員に率いられた 1 万から 1 万 2000 人の叛乱軍はアルメニア東部の山岳地帯ザングズル(ナヒチェヴァンとカラバフにはさまれた地域)に移動し、抵抗を続けた(Ter Minassian 1989: 235, 243)。

しかし、春先のザングズル地方の気候は厳しく、食糧難に陥った。ガレギン・ヌジュデ(Garegin Nzhde)らダシュナク党反共グループが徹底抗戦を唱え、共産主義者、ロシア人狩りを行って士気向上を図ったが効果ははかばかしくなかった(Simonyan, A. 2000: 452-473)。最終的にはダシュナク党「救国委員会」内の指揮系統の混乱(特にヌジュデとヴラツィアンの対立)と食糧不足で叛乱軍は弱体化し、さらにはソヴィエト政府の首班ミアスニキアンがネップ(新経済政策)をアルメニアに導入して農民を懐柔したため、ダシュナク党側の敗北に終り、21 年 7 月末には大多数がペルシャに脱出した(Hovannisian 1996: 403-406)。

## 3. ダシュナク党の国外での活動と民主自由党との関係

ザングズルの叛乱後、ダシュナク党右派はまずペルシャに潜伏し、祖国奪還の計画を立てていたが、ビューロー(ダシュナク党の最高意思決定機関)内では反乱の失敗をめぐるヴラツィアンの責任問題の是非を議論に終始して進展がなかった。以後、ダシュナク党はブカレストやウィーンなど各地を転々としながら党大会を開き、その過程で第一共和国初代首相 H. カチャズヌニら親ソ派が脱落し、25 年 1 月ウィーンでの党大会で反共路線を最終的に確認することになる(Qyurqtshyan 1988: 53, 56)。

ところで、1920年代国外のアルメニア人社会では、富裕階層を代表する民主自由党と中間階層を代表するダシュナク党右派とが主導権争いを演じていた。民主自由党にはアルメニア慈善協会からの資金援助があるため、メディアにも大きな影響を与えていた。在外コミュニティ紙の多くは民主自由党寄りの論調で、特に、民主自由党系の新聞『民族』、『闘争』では親ソ・反ダシュナク的な論陣を張っている。

オスマン帝国崩壊後、ムスタファ・ケマル率いるトルコ国民議会派が権力を確立しつつあるアナトリアの領土確定がなされたローザンヌ会議で、英仏伊外相に陳情に訪れていた両党の間に論争（「アルメニアの故郷」論争）が起こった。1922年11月に民主自由党側（アルメニア国民代表団）からK. ノラドゥンギアンとK. スィナビアン、ダシュナク党側（アルメニア共和国代表団）からA. アハロニアンとA. ハティスィアン元首相がローザンヌに派遣された。2つの代表団はローザンヌでは代表部をイスタンブル出身の著述家L. パシヤリアンの書齋に構え、両代表団が会議では合同で連合国（英仏伊）に要求を行うとの覚書を交わした。その際、連合国に対して旧オスマン帝国内のアルメニア人地域に国家を建設する場合の領土要求について話し合われた。その案として、

- 1：「アルメニアの故郷」はアメリカ大統領ウィルソンの提示した案による<sup>8</sup>
- 2：ソヴィエト・アルメニアと（旧オスマン帝国下のアルメニア）諸州とが合併する
- 3：極端な場合、「アルメニアの故郷」はキリキア（アナトリア東南部）に建設する

の3つを用意した。

12月16日、アルメニア代表団は会議の開催国に自分達の要求の聞き取りだけでも行うように申し入れた。これが審議される際に新生トルコ代表が連合国に激しく抗議した。同時に、1921年のモスクワならびにカルス条約締結後はアルメニア人とトルコ人の間で領土問題に関する議論は存在せず、もしアルメニアを会議に招待するのならば自分達が参加を見送る旨を述べた。トルコ代表、わけでもルザー・ヌル・ベイは、オスマン帝国内の少数民族の代表がこの会議に招待されて陳述を行うことに不快感を表明した。

そこで連合国側が譲歩し、少数民族代表は部会の非公式協議に招聘し、そこで連絡協議することを決めた。12月26日にアルメニア代表団はローザンヌ会議の部会に呼び出された。

アルメニア代表の発言の後、「アルメニアの故郷」の境界について連合国側からの質疑が始まった。その際、アハロニアンとハティスィアンはアルメニア諸州とソヴィエト・アルメニアとの合併案(上記第2案)には反対したが、ノラドゥンギアンとスィナビアンはオスマン領内に独立したアルメニア人国家を建設するのは不可能との見解を示した。

---

<sup>8</sup> 1920年のトルコ・アルメニア戦争の調停案としてウィルソンが示したもの。この戦争の経緯については、山内昌之(1974)を参照のこと。

これに対して、連合側はトルコの宗主権の下でアルメニア北東部あるいはキリキアに「アルメニアの故郷」を建設し、そこに 50～60 万のアルメニア人を居住させる案を提示し、アルメニア代表に受け入れるよう迫った。もっとも、この案でもトルコ側が同意しなかったため結局アルメニアの領土要求は実現しなかった。

#### 4. ソヴィエト政権と民主自由党の接近

第一次大戦開始から 7 年近くにわたる混乱でアルメニアの社会と経済は完全に崩壊した。1922 年時点での耕作面積は 18 年と比べて 30%減少した。また、大量の難民が流入し、その数は全人口の約半分を占めるほどになり、飢餓人口は約 20 万を数えた<sup>9</sup>。

これに対し、ソヴィエト政権は経済再建のためロシアからの援助を期待したが、それだけでは不十分であった。そのため、ソヴィエト・アルメニア政府は、1921 年 9 月 15 日付けで布告（「アルメニア救援委員会（HOK）の設立に関して」）を出し、救援物資や復興資金獲得に乗り出した。救援委員会は旧ロシア帝国内のアルメニア人コミュニティだけでなく、設立された。

一方、1922 年 1 月に民主自由党の指導者の一人 A.タルピニアンがソヴィエト・アルメニアを訪れてミアスニキアンらの歓待を受け、党内での親ソ派となった(Dallaqyan 1999: 32-33.)。それ以後、民主自由党はソヴィエト・アルメニアの作家 H.トゥマニアンを理事に招いてイスタンブール、タブリーズ、カイロ、パリ、ロンドン、ニューヨークのアルメニア人コミュニティ内にも「アルメニア援助委員会」を設立し、積極的な経済援助をソヴィエト側に行った。

その活動の一例を挙げれば、アルメニア救援委員会の初期（1921～23 年）だけでもトウモロコシ 42,000 プード（約 688 トン）、小麦 30,000 プードがエレヴァンに輸送された(Vardapetyan 1966: 39, 57)。さらに、運河建設（1923 年着工のシラク運河、エチミアジン運河など）、住宅建設（エレヴァンのヌパラシエン<sup>10</sup>地区など）に多額の資金援助を行い、ソヴィエト・アルメニアの社会資本の整備が進んでいった。

ところで、ソヴィエト政府の首班ミアスニキアンは、ラムカヴァル党の代表として当時エレヴァンに滞在し、『ソヴィエト・アルメニアの産業』なる書物を著してソヴィエト・アルメニアを「自分達の故郷」として賞賛したガリギアンを評して、自書の中で以下のように述べている。

<sup>9</sup> Suny(1993: 137). ちなみに、1926 年時点のソヴィエト・アルメニアの人口は 72 万人であった。

<sup>10</sup> アルメニア語で「ヌパルの居住区」という意味で、民主自由党に近い政治家ボゴス・ヌバル（=ヌパル）を記念して付けられた。彼は、1919 年のパリ講和会議ではアルメニア国民代表団団長を務めてダシュナク党员アハロニアン率いるアルメニア共和国代表団と対立した。さらには同年の共和国議会選挙では投票ボイコット運動を繰り広げた。（これについては吉村 1999 を参照のこと。）第一共和国崩壊後はパリを中心に政治活動を行っていた。なお、1937 年のアルメニア救援委員会解散後にこの名称はソヴェタシエン（ソヴィエト居住区）と変更されたが、独立後旧称に戻された。

なぜ民主自由党はこのようにしてこの問題（ソヴィエト・アルメニアを「自分達の故郷」として認知すること）にアプローチしたのだろうか。

この問いに答えるには、民主自由党がどのようなものであるかについて説明する必要があるだろう。同党はアルメニア人コミュニティのブルジョワ、言い換えればトルコのアルメニア人のブルジョワを代表している。端的に言えば、民主自由党は西アルメニアの富豪の代表なのだ。西アルメニアの資本家は経験豊かな人間である。多くの国に滞在し、そこで見聞を重ね、それを何千何万と身に着けているのだ。豊かで栄えている国々とは別物である。西アルメニアの資本家はこうした国々とは組織的にはつながっていない。まさにこの観点に立てば、アルメニア人コミュニティの富豪は在地の市民を代表せず、名士でもなければ政治的権威でもない。…

民主自由党にとってのソヴィエト・アルメニアは明白な実体である。現実主義者の彼らは、ソヴィエト・アルメニアを偵察し、観察し、理解するために先遣部隊を派遣してきた。調査隊は国外に戻り、報告した。そして、ソヴィエト・アルメニアという名の珍獣がただ存在するだけでなく、ソヴィエト以前のアルメニアに勝るとも劣らず生きているということが分かったのだ。そして、さらに注目すべきことは、ソヴィエト・アルメニアには多くの仕事があり、「収益」なる現物もある。…

結局、ブルジョワ愛国者として民主自由党員は、彼らの『闘争』紙の論説で語っているように現在の小さなアルメニアに大きな明日を見ているのだ。ダシュナク党員はこのようなことは出来なかったので、民主自由党の処方箋に従ってポリシェヴィキがしているようにすれば如何だろう！？（下線部原典は斜体）<sup>11</sup>

ミアスニキアンは、民主自由党は「ブルジョワだがブルジョワ政党ではない」といった詭弁を弄してまで、同党を評価しているところに、この経済復興事業における民主自由党の役割を期待していることが伺えよう。

## まとめ

「第一共和国」の領域は第一次大戦後の権力の空白によって生み出されたために、エレヴァンは当時アルメニア人社会の政治・文化の中心となっていなかった上、近隣地域からの難民の流入で経済的にも混乱していた。そして、その領域に成立したソヴィエト・アルメニア政府は経済復興のために民主自由党の政治力を利用して資金を獲得しようと同党に接近した。

一方、オスマン帝国下のアルメニア人社会の解体でその勢力基盤を失い、ローザンヌ会議までには独力で「アルメニアの故郷」を建設することを断念した民主自由党は、ソヴィエト・アルメ

---

<sup>11</sup> Myasnikyan(1926: 9-10). ちなみに西アルメニアとはオスマン帝国領のアルメニア人地域を指す。

ニアに影響力を及ぼしながら、在外コミュニティ内におけるダシュナク党との覇権闘争を有利に進めるためにソヴィエト政権に接近していた。このため、両者の中間にいたダシュナク党は孤立し、23年11月23日にソヴィエト・アルメニア内では解党させられる伏線となった。

結局、ソヴィエト・アルメニアは、ブルジョワ政党民主自由党とソヴィエト政権との思惑の交差の上に「アルメニアの故郷」としての体裁を整えていくことになるのである。

(本稿は2003年度文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。)

<参考文献>

外国語文献 (ロシア語とアルメニア語のものはラテン文字に転写してある)

Afanasyan, S. (1981), *L' Arménie, l' Azerbaïdjan et la Géorgie de l' indépendance à l' instauration du pouvoir soviétique (1917-1923)*, Paris.

Arzumanyan, M. V. (1973), *Arhvirqic veratznund* (破滅から再生へ), Yerevan.

Bor' jan, B. (1929), *Armenija mezhdunarodnaja diplomatija i SSSR* (アルメニア、国際外交とソ連邦), Moskva.

Dallaqyan, K. (1999), *Rramkavar azatakan kusakcut' yan patmut' yune (1893-1924)* (民主自由党史), Yerevan.

Hovannisian, R. G. (1996), *The Republic of Armenia*, vol.4, Berkley & L. A.

Matossian, M. K. (1962), *The Impact of Soviet Policies in Armenia*, Leiden.

Meliqset' yan, H. U. (1985), *Hayreniq-sp' yurrq arrnchut' yunnere yev hayrenadardzut' yune (1920-1980 t' t')* (本国・離散民関係と本国帰還、1920~1980年), Yerevan.

Mjasnikyan, A. F. (1925), *Armjanskije politicheskije partii za rubezom* (国外のアルメニア諸政党), Tiflis.

Qyurqtshyan, H. (1988), *Urvagitz H. H. D patmut' yan 1919-1924 hngameaki* (アルメニア革命連盟1919年から1924年までの5年間の素描), Athenq.

Simonyan, A. (2000), *Zangezuri goyamarte 1920-1921 t' t'* (ザンゲズールの生存をかけた闘争:1920~1921年). Yerevan.

Simonian, H. (2000), khmbagrutyun, *Hayoc patmutyun*, (H. シモニアン編「アルメニア史」) Yerevan.

Suny, R. G. (1993), *Looking toward Ararat*, Bloomington and Indianapolis.

Ter Minassian, A. (1989), *La République d' Arménie*, Bruxelles.

Vardapetyan, A. V. (1966), *Hayastani ognut' yan komiten (1921-1937)* (アルメニア援助委員会、1921~1937年), Yerevan.

Vraccyan, S. (Mandalian, J. G. transl.) (1943), *Armenia and the Armenian Question*, Boston.

Vraccyan, S. (1955-1967), *Kianqi ughinerov*, (人生の途上で) 6vols, Beyrouth.

Yoshimura, T. (2003) *Qaghaqakan iradardzut' yunnere Hayastanum yev hay heghap' okhakan*

dashnakcut' yun kusakcut' yune (1920-1923t' t' .) (アルメニアの政治状況とアルメニア革命同盟：1920 - 1923 年) , 第 1 回国際アルメニア学会発表用原稿.

#### 邦語文献

高橋清治「ザカフカス——1918 年夏」, 『歴史学研究』, 409 号, 1974 年, 1-3 頁.

山内昌之「トルコ・アルメニア戦争とトルコの対ソ関係 (1919~1920)」, 『スラヴ研究』, 19 号, 1974 年, 97-134 頁.

吉村貴之「アルメニア第一共和国史再考」, 『年報 地域文化研究』 2 号, 1999 年, 255-271 頁.

吉村貴之 「ナルバンディアンの旅」, 『ロシア史研究』 67 号, 2000 年, 45-60 頁.

吉村貴之「アルメニア『第二共和国』の政治」, 『アジア研ワールドトレンド』, 2002 年 4 月号, 28-31 頁